

# チェルノブイリ通信

2005年3月4日

No. 63

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内  
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimmu@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



検診を終えた子どもたちと清水医師。甲状腺の検診では、子どもたちの笑顔を撮影するのは難しい。それはもうみんな緊張しているから。でも検診が終わり、その場で大丈夫と分かれば、この通り、とびっきりの笑顔で応えてくれます。

\*工房「のぞみ21」

ナターシャさんからの報告

\*ナターシャ・コバレバさんの生活の記録

\*お母さんになるリュエダの近況報告

\*チェルノブイリの報告会

2004年の調査団、検診活動について

\*ありがとう、事務局長

谷口恵さんの旅発ちに際して

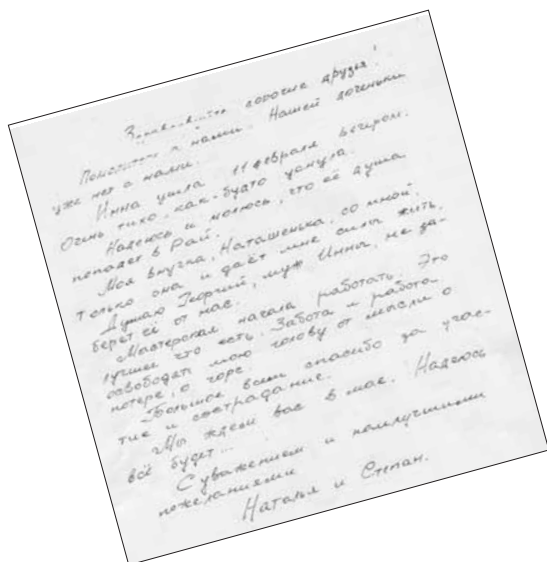
\*募金者からのメッセージ

# 工房のぞみ21 ナターシャさんからの報告

～私の娘、ニーナは2月11日に天に召されました～

工房のぞみ21のナターシャさんの長女、ニーナさんの病については、前回の通信に同封した手紙でお伝えさせて頂きましたが、その後多くのお見舞い金を会員の皆様からお寄せ頂きました。日本チェルノブイリ連帯基金の神谷さんのご協力を得て、1月29日にお見舞い金50万円をナターシャさんに手渡すことができました。

そのナターシャさんから、2月16日、次のFAXが届きました。（報告：矢野 宏和）



親愛なる友人の皆様！

私達と共に祈りください。  
私の娘、ニーナは2月11日に天に召されました。  
それは、静かに眠る様な旅立ちでした。  
娘の魂が天国へ行けますよう、祈り願うものです。  
孫のナターリヤと私自身だけが、私の生きる力です。  
娘の夫のゲオルギーは多分、ナターリヤを私達のところに置いておいてくれるでしょう。  
工房「のぞみ21」は再開しています。この工房があるおかげで、私は救われました。  
仕事は私を悲しみと苦悩から解放してくれますから。  
皆さんの助力と努力にはお礼の言いようありません。  
5月に皆様とお会い出来ることを願っております。  
きっと全ては・・・。

尊敬と最高の思いを込めて  
ナターシャとステパン

今、このチェルノブイリ通信を読んで多くの皆さんもそうだと想いますが、ナターシャさんからのFAXを手に、私はしばし呆然としていました。そうして、FAXの最後に記された「きっと全ては・・・」の言葉に目が留まりました。

ナターシャさんは「きっと全ては・・・」と書いて、その後に、どう言葉を紡ごうとしたのだろうか。

そんなことを考えながら、私は初めてナターシャさんの娘、ニーナさんに会ったときのことを思い出していました。その時、すでにニーナさんは結婚されていて、娘のナターリヤを子宮に宿していました。

ナターシャさんの長男、ニーナさんにとっては実弟となるオレグが甲状腺ガンから肺ガンを患い二十歳の時に亡くなったことを聞いた後だったこともあり、私はニーナさんが新たな命を生み出そうとしていることを知って、少しだけ心が軽くなったように感じました。もうこれ以上の哀しみが、ナターシャさんの家族に降りかかることはないだろう、と。（ナターシャさんの息子、オレグが亡くなるまでの生活史についてはD4をご参照ください。）

しかし、それは、現在の地球では、何の根拠もない思い込みに過ぎなかったことを、今、痛感しています。

残された娘、ナターリヤのこと、夫であるゲオルギーさんのこと。そして、ナターシャさんステパンさん夫妻のことを思うと、その哀しみはあまりに深く、私の想いは行き場を失います。仮に、目の前にナターシャさんがいたとして、私は視線を定めることができないまま、かける声もなく、その肩に触れることすらできないような気がします。

しかし立ちすくんでいるわけにはいきません。今度、ナターシャさんたちに会いにいったなら、ナターシャさんたちが必要としている言葉を、きちんと伝えなければなりません。ナターシャさんが今、必要としていること。それは何か？

私は再び、FAXに記されている「きっと全ては・・・」と書き残された言葉を見つめました。

すると、こんな想いが浮かんできました。「きっと全ては」と書いたナターシャ



ナターシャさんと孫のナターリヤ。  
娘を、そして母を失い、二人で生きていく。

さんは、この出来事の全てを受け止めようとしたのではないかと。そして、そのうえで前に進むようとしているのではないかと。

事実、ナターシャさんからのFAXにはこう記されています。「工房「のぞみ21」は再開しています。この工房があるおかげで、私は救われました。仕事は私を悲しみと苦悩から解放してくれませんか。」

ナターシャさんはその眼差しを陽に向け、全うすべき自分の人生と仕事に正面から臨んでいるのです。オレグが亡く

なったその後もそうしたように。今あるその苦境を、誰かのせいにするのではなく、あのチェルノブイリの原発事故がなければと、思う間もなく、工房のぞみ21の若い所員たちに笑顔で応えながら、自らの日々を今も営んでいるのです。

そんなナターシャさんに必要なもの。それは彼女が最もよく口にする言葉。すなわち「希望」に他なりません。私は、それを「人のつながり」と言い改めます。

前回のチェルノブイリ通信の送付に際して、ナターシャさんとニーナさんの状況をお伝えした際、177名もの方からお見舞いの言葉とカンパを寄せて下さいました。ナターシャさんからその状況を伝えるFAXが届いたのが、チェルノブイリ通信を発送する直前だったため、その様子を伝える手紙を急いで書いて同封するのがやっとでした。

が、それにも関わらず、177名もの方々が、ナターシャさんたちを支えるためにつながってくれました。そして、その想いは、お見舞い金やメッセージに変換され、ニーナさんが亡くなる10日ほど前に手渡すことができたのです。

ニーナさん亡き今、それは燃え盛る大森林に、僅かな一滴の水を落としただけに過ぎなかったのではという見方もある

かもしれません。けれども私は思うのです。全てはそこから、始まるのだ。こうして生まれたつながりの一つひとつが、命を大切に育みうる世界を創っていくのだと。命安らかなる世界への道筋として、今回のようなつながりを育んでいく以外の術を、私は思いつきません。

この地球の歴史を省みれば、今ほど命が蔑ろにされる時代もないことがすぐに分かります。失われし命への哀しみと、残された命の苦難と。地球の各地で、哀しみと苦しみは、日々刻々と生じています。

そんな状況を変えていくという意志をもって、私たちチェルノブイリ支援運動・九州は、ナターシャさんたちを、そして工房「のぞみ21」を支えていきたいと考えています。そして、このチェルノブイリ通信を通して、ナターシャさんたちとのつながりを会員の皆様と共有していきたいと考えております。

チェルノブイリ支援運動・九州

代表 矢野宏和

## チェルノブイリ支援インタグコーヒー値上げのご案内

インタグコーヒーの販売価格は、4月1日から720円になります。

いつもご利用頂いておりますインタグコーヒーが4月から値上げされることになりました。その背景と理由についてお伝えいたします。値上げの大きな理由の一つは、米軍などによるアフガニスタンやイラクへの武力攻撃にあります。インタグコーヒー生産者協会の活動は、森林農法を推進しているということで、重要な活動として国際的に評価され、海外のNGOから財政支援を受けていました。ところが、アフガニスタンやイラクへの武力攻撃が始まり、多くのNGOは、その支援をアフガニスタンやイラクに向け始めました。その結果、インタグコーヒー生産者協会に対する支援はほとんどなくなり、協会の運営が危機的な状況に陥りました。そのために、インタグコーヒーのフェアトレードに取り組んでいるウインドファームでは、購入価格を20%アップして、今秋、購入するコーヒーの代金も先払いしています。そのような事情ですので、インタグコーヒーを愛飲されている皆様には、大変申し訳ないのですが、ご理解をいただければ幸いです。



## 長男オレグの死と工房「のぞみ21」の運営

チェルノブイリの悲劇を乗り越えて



ある日、息子のオレグが元気なく帰ってきた。友達の家に入れてもらえなかったという。「お前は白血病だから」と。

「放射能の病気は感染する」。チェルノブイリ原発事故後、確かな情報は伝えられず、そんなデマが飛び交った。匂わず、目にも見えず、触れない。そんな放射能の腫れがかえって現実味を与えるのか、人々は幻惑される。

オレグの世界は急速に閉塞していった。その小さな体格にも関わらず、教室では一番後ろの席にオレグは座らせられたのは、教師でさえも、自分のそばに病人をおきたくないからだった。

教室の、そして社会の隅へと追いやられながら、この子は生きていけるのだろうか。息子の将来を思うとき、不安で胸を締めつけられた。

通う病院の待合室は、いつしかそんな不安を抱える母親たちの相談場所になっていた。子どものために、何かをしなければならなかった。

保母の仕事をしていたからか。必要なのは、放射能に怯える子どもたちが安心して過ごせる幼稚園や小学校だと思った。このままでは、オレグの居場所がなくなるという危機感は、実現可能なヴィジョンを描かせる。

「仕事場を作りたいのだけれど」とある日、夫のステパンに話かけたとき、反対される気はしなかった。その必要性は十分に理解してくれていたから、サポートしてくれるだろうと思っただけ、彼もそのつもりだったはずだ。

ただ、その時はまだ彼も予想していなかっただろう。ステパンが自分の仕事を退職してまで関わることになるうとは。

しかし、それは必然だったと思う。自分は洋裁を教えることができたので、女の子たちを受け入れることはできたが、それだけでは男の子たちの仕事を作れない。だからどうしても木工の仕事を作る必要で、その担い手は、大工の技術を持つステパンしかいなかった。

中途半端な関わり方では何をやっても意味がない。求められるのは、深い決意と迅速な行動だった。

結局、建設局という愛着のある職場をステパンは退職する。と、同時に無料で使える廃屋を探してきた。かつて幼稚園として使われていたその建物を、彼はオレグと一緒に毎晩、改装作業に没頭し、立派な工房に仕上げた。

工房の名は「のぞみ21」。希望に満ちた新しい世紀を目指すという想いを込めた。

やがてその場に、チェルノブイリの被害を受けた子どもたちが少しずつ集まってきた。自宅にこもりがちな若者たちにとって、そこは、家の外へ出ていくうえで足がかりになる。仕事場というより、友と語らうための空間だった。

仕事が始まる前には、必ず雑談がある。それは昨晩のテレビの話であったり、片隅ではひっそりと定まらぬ恋の行方を相談していたりと、放っておけば、おしゃべりはいつまでも続く。「さあ、おしゃべりはそこままでにして、仕事をしなさい」といつも命じなければならなかったが、それは少し辛かった。白血病を克服したオレグもその輪の中でいつも楽しそうにしていたものだから。



工房での作業風景

オレッグには、芸術的な才能があり、特に絵画にその力は滲み出た。専門学校を卒業したオレッグは、工房において、指導的な役割を担うようになる。働くスタッフたちも、彼を兄のように慕い、彼も技術と才能をもって応えた。

自らを必要とされる場所。人と力を合わせる幸せを実感できる場所。除け者にされて以来、誰より、この場所を望んでいたのは、息子のオレッグだったろう。そこは、同じ年頃の仲間とつながることができる学校のような空間になっていた。

夢は実現したかのように思えた。充実した日々が、いつまでも止まらないオレッグの咳に気付くのを遅らせたのか。チェルノブイリ原発事故は白血病の他にもう一つ、オレッグの身体に別の病を残していた。甲状腺ガンである。

止まらない咳は、それがすでに肺に転移していることを示していた。

オレッグにとって最期となる二十歳の誕生日を、彼は入院先のドイツの病院で迎えた。主治医はプレゼントに何か欲しいものはないかと尋ねた。

「恋人を呼んで欲しい」、それが彼の望みだった。その願いは叶い、今、手元には、鮮やかな夕日を背に微笑む二人の写真がある。恋人と過ごす幸せが、そこに詰まっていた。

生きる望みを抱きながら、このときにももう、オレッグは全てを知り、受けとめていたのだろうか。「この病気が治り、退院することができたら、僕はこれまでとは全く違う気持ちで生きていくことになると思う」と語る彼の言葉には、覚悟の気配がそこはかとなく漂っていたように思う。

そして、その刻は来た。ベットの傍で心配そうに見守る自分たちを気づかってくれたのだろう。オレッグはこんな言葉をわたしたちに語りかけてくれた。

「胡桃のようだよ」と。  
「胡桃たちは、胡桃のように堅く、一つだ。だから、どんなことがあっても離れたりしない」

鉛色の雲が低く垂れこめるベラルーシの二月。そんな言葉を残してオレッグは逝った。  
胡桃のようだと言われても、心は深い喪失感に襲われ、帰宅が苦痛になった。家に帰れば、オレッグの不在を痛切に感じてしまうから、終業の時間を過ぎてても、工房に残り仕事を続けた。

涙で視界がぼやけ、仕事は全然はかどらなかつたけれど。

このとき、はじめて、オレッグの人生を思いついた工房「のぞみ21」という場所が、今度は自分たちが生きていくために必要な場所になった。この工房で働く三〇余名のスタッフ全てにとって、そうであるように。

オレッグの死は、彼を兄のように慕っていたスタッフたちにとっても悲痛な出来事だった。皆を前にして、不安を与えるような表情はできなかつたが、むしろそんな状況に救われた。

自らを支えるのに精一杯であるはずなのに、まだまわりの仲間を気遣うことができた。日々のたわいのない会話のなかで、笑える自分がいた。それに気付く度に、一步、また一步、再生への手応えを得ていく。

売上げが少なく、運営が厳しくなつたときに「給料はいらない」と言つて、工房の存続を願うスタッフたち。そんな生きる意志に支えられながら、くじけそうになる自分たちの心を必死の想いで立て直していった。

そして、もう目には見えないけれど、そこかしこでオレッグが自分たちを手伝ってくれている。例えば日本とのつながりを得たという幸運。それもオレッグの存在を通して生まれたように思う。

オレッグの死から二年が過ぎたある日、甲状腺がんの早期発見に取り組みチェルノブイリ支援運動・九州という団体のスタッフが取材に来た。「甲状腺の手術をした若者が働く作業所があ

る」という漠然とした情報だけを頼りにここを訪れたようだったが、取材のなかで私たちの息子が甲状腺ガンで亡くなったというを知りショックを受けていたようだった。

それ以来、その団体はベラルーシを訪れる度に、日本の人々を工房に連れてきたり、工房の作品を定期的に前払いで購入してくれるようになる。それまでは、作った作品の市場がベラルーシ国内に限られていたので、こうした日本とのつながりは大きなサポートになった。

日本という国を以前より身近に感じるようになったものの「日本に来て、これまでの体験を話して欲しい」という提案を受けたときにはさすがに驚いた。

日本に行くことなど全く考えていなかったし、一体何を話せばいいのか、途方にくれてしまったが、そのとき、「差し支えなければオレッグさんのことも語って頂ければ」と言われて、振り返る間もなく過ごしてきたこれまでの歩みが一気に思い浮かんだ。

それを話せばいい。すべてはチェルノブイリ原発事故を起点として始まる私たちの歩み。最愛の息子を失った哀しみは今も消えることはないけれど、それを支え合って乗り越えて築いた今日までのことを私たちは誇りに思う。決心を固めたとき、「自信を持って話せばいい」と、フレイムの中で、オレッグが微笑みかけてくれたような気がした。

(文責 矢野宏和)

# お母さんになる リューダの近況報告

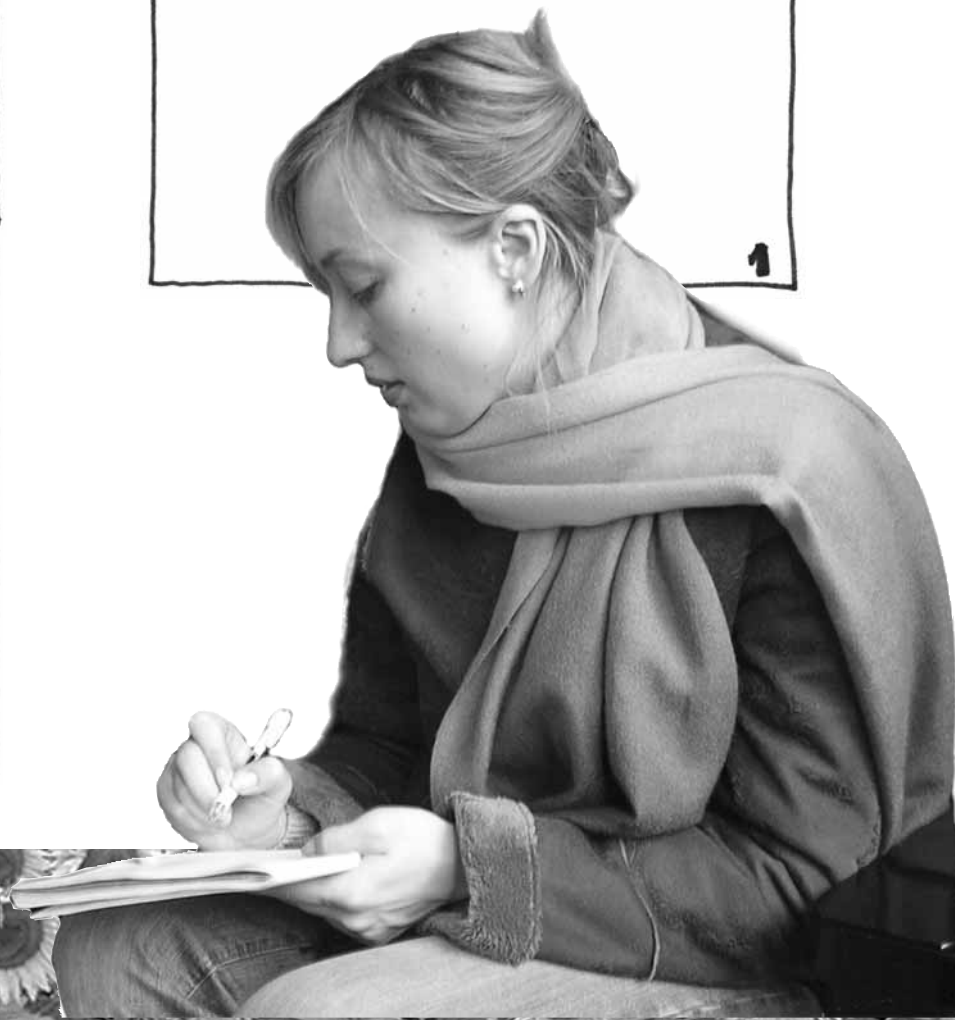
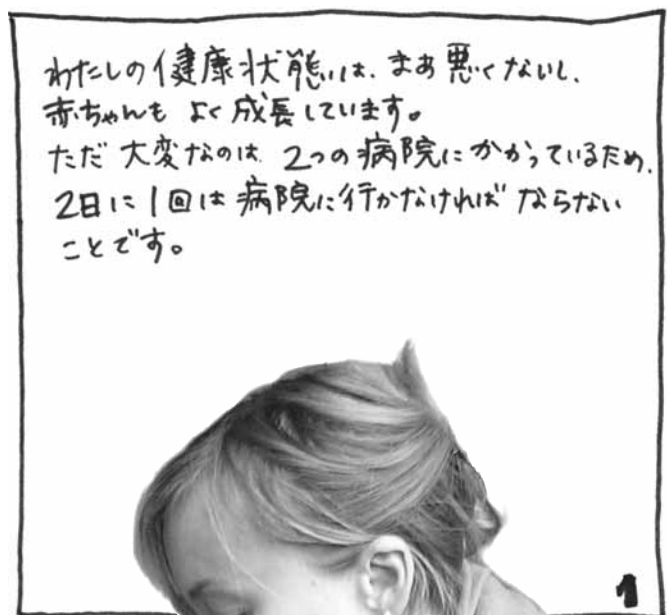
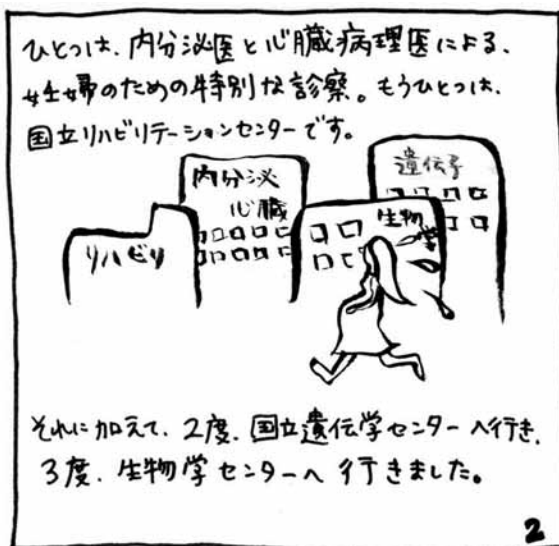


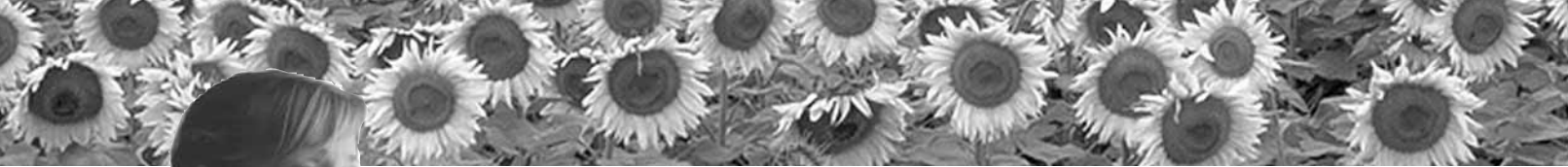
現地スタッフのリュドミラ・ウクラインカ（愛称リューダ）が、もうすぐお母さんになる。リューダは、15歳のときに甲状腺ガンであると誤診され、摘出手術を受けた。（詳細については、2004年活動報告集にも掲載されています。）それ以来、ホルモン剤を飲み、身体の不調と付き合いしていく日々が始まった。

甲状腺の摘出手術を受けた女性にとって、妊娠、出産は、大きな不安として立ちはだかる。「本当に元気な赤ちゃんを産めるのだろうか」「自分の体力はもつのだろうか？」事故から19年が経とうとしている今、事故当時小さな子どもや赤ちゃんだった人たちが、その適齢期を迎えている。

リューダもそんなひとりだ。そんな不安と向き合いながら、新しいいのちを育てている。最近では、心臓の調子も悪い彼女。「おなかの中の赤ちゃんと一緒に、どんな日々を送っているの？どんな気持ち？」と聞いてみたら、詳しく近況を教えてくれた。4月出産予定の彼女は、揺れる気持ちと、病気を持つがゆえの頻繁な病院通いの中で、一歩ずつ母親への道を歩んでいる。

（谷口 恵）





でも、今がわたし子どもにとって  
重要な時であり、落ち着かなければ  
ならないということは分かっています。  
入院せずにすんで、よかったです。



7

そして、妊娠に関して一番感じていることは...



妊娠した初めのころは、とてもとても1日1日  
ナーバスになっていたけど、今はほんの  
少し1日1日だけで、とても幸せです。

8

追伸:

夏みさんが来た時に、道で捨てられていた犬、  
お医者さんや家族は手放すようにと言って  
いますが、それはとてもむずかしいこと  
です。わたしは彼が大好き  
なので、今もいっしょにいます。



9

それに、たっさんたっさん  
血液検査をします。  
月に2回です。



虫歯は、今が所  
治しました。

4

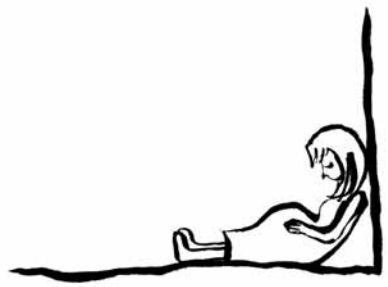
たっさんの医薬品を飲みます。



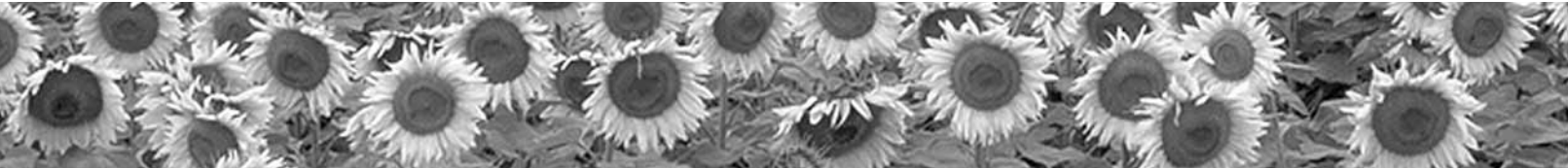
だから、これがわたしの新しい仕事だ  
と言ってもおいて"らう" (笑)。

5

妊娠は、わたしからたっさんのエネルギーを  
奪います。1日9~10時間は眠るので、  
あまり仕事はできなくなっています。  
このことは、わたしをいらつかせます。



6





武市宣雄医師  
広島甲状腺武市クリニック院長



星正治 教授  
広島大学原爆放射線医科学研究所



三本亜希臨床検査技師  
広島甲状腺武市クリニック



寺嶋 悠  
チェルノブイリ支援運動・九州

## 『チェルノブイリ調査隊・検診団』活動報告会—2005年1月30日

1月30日（日）福岡市アミカスにて、「2004年夏の調査隊、秋の検診団派遣報告会」が行われました。報告者は、調査隊参加者で元長崎県職員組合女性部部長の西首延子さん、同じく調査隊参加者で中津江小学校教諭の小山浩一さん、チェルノブイリ支援運動・九州代表の矢野宏和、運営委員の寺嶋悠でした。

まず矢野から事故やチェルノブイリ支援運動・九州のこれまでのあゆみ、2004年に派遣した調査団・検診団の目的・内容等について簡単な説明があり、その後、調査隊の報告がなされました。西首さんからは、ベラルーシ共和国という国の紹介の後に、調査隊の行程順の報告と感想、長崎県職員組合女性部のチェルノブイリ支援に対する取り組みについてお話いただきました。続いて小山さんより、チェルノブイリだけでなく、ヒロシマ、イラク、水俣という地域の風景や人々の写真を用いながらの、学校の子もたちと一緒に取り組んでいる「いのち」をテーマとした活動の報告をいただきました。そして最後に、寺嶋より検診団報告がありました。検診の目的と方法、実際の検診現場の様子や、検診団派遣に合わせて開催された国際医学シンポジウムの様子などが伝えられました。

ベラルーシという国や事故後の被害状況、チェルノブイリ支援運動・九州の活動について、これまでほとんど知らなかった方にも入りやすい内容となりました。報告会終了後、来場者アンケートより、『西首さんの感想が初参加の私にとってわかりやすかった』、『小山さんの学校での取り組みが興味深かった』との感想も寄せられました。

## 『チェルノブイリ検診団』活動報告会—2005年2月20日

2月20日（日）広島市留学生会館にて、「2004年秋の検診団派遣報告会」が行われました。報告者は、広島甲状腺クリニック院長の武市宣雄医師、広島大学原爆放射線医科学研究所の星正治教授、広島甲状腺クリニックの三本亜希臨床検査技師、チェルノブイリ支援運動・九州運営委員の寺嶋悠でした。

最初に寺嶋より、チェルノブイリ支援運動・九州の概略説明と、検診の様子や検診を支える現地の医療関係者の紹介、医学シンポジウムの様子などを含めて検診団派遣活動全体についての報告がありました。続いて武市医師、三本検査技師より、医療専門家としての立場から見たベラルーシでの検診についてお話をいただきました。武市医師からは、今回、ピテフスクという非汚染地域で実施した検診の意味と重要性の解説、過去9回にわたり行ったストーリン地区での検診結果も合わせて数々のデータ報告がなされました。三本技師からは今回の検診実施方法の報告がなされ、医療支援活動にも大きく影響を与えるベラルーシ共和国の情勢についても触れていただきました。最後に星教授より、放射線を撮影した映像も織り交ぜながらの放射線の種類や特徴の解説、放射線専門家としての立場から見た放射能被害とチェルノブイリについてお話いただきました。

今回の4名の報告から、ベラルーシと日本の医療専門家、放射線専門家、市民団体の連携により、人道支援という意味合いだけでなく、ベラルーシと日本双方にとって学術的にも価値のある活動がなされているということが再確認されました。



# ありがとう、事務局長

## 数々の思い出を胸に



谷口 恵 (たにくち めぐみ)

2000年よりチェルノブイリ支援運動・九州の事務局員として勤務。2002年より事務局長に就任。ペラルーシでの医療検診、日本国内における広報活動をはじめ、チェルノブイリ通信の発行やチェルノブイリの学習会や交流会など様々なイベントを企画し、あらゆる業務を遂行する。2005年より山梨の清里にて、子どもの自然体験をテーマとする新たな仕事に取り組む。

### 谷口恵さんの旅発ちに際して

事務局の中心となってチェルノブイリ支援運動・九州の屋台骨を支えてきた谷口恵さんが、この度、事務局を去ることになりました。今後は、住む場所を福岡から山梨に移し、運営委員として活動に参加することになります。ですが、事務局長としての原稿はこれで最後となります。多忙を極める事務局の仕事を通して、感じたこと、学んだこと、そしてこれからのビジョンをお伝えします。

4年間の仕事を振り返って  
この3月までで、チェルノブイリ支援運動・九州の事務局を去ることになった。思えばこの4年間、大部分の日々をこの部屋で過ごした。コーヒートの香る年季の入った建物の片隅、「倉庫かと思ったら事務所なんですわ」と言われる部屋だ。冬はあまりに寒いので、コンクリートの床にダンボール、その上にわたしが学生時代にさんざん使い古したカーペットを敷き、窓やドアの隙間は布テープでふさいだ。夏はあまりに暑くて意識がもうろうとするので、夕方になると昼間何をしてたのか思い出せない、なんてこともよくあったなあ。去年からは、暑さをしのぐ設備も整ったし、事務局の人数が増えた分、少し冬が暖かくなった。

時には「ジャーン！」とシンバルを打ち鳴らしてみることもある。わたしの役割は、一日一日のテンポを刻み続けること。毎日タンタン、タンタン、淡々、たんたんと。  
構えている。それは、言ってみれば、大切な瞬間瞬間の積み重ねだ。最近、友人とにわかロックバンドを組んで、ドラムを叩いている。事務局としてのわたしの日々は、たぶんこのドラムと同じだ。リズムを正確に心地よく刻めば、ほかの楽器たちの旋律は自由に踊り弾むことや、違う楽器同士混ざり合って美しいメロディを奏でることが出来る。(まあ、わたしのドラムの腕はとうてい「心地よい」までに到達していないけど。)リズムとテンポ次第では曲調も、伝えるメッセージも、その色が違ってくる。でも、決して主役ではない。わたしの役割は、一日一日のテンポを刻み続けること。毎日タンタン、タンタン、淡々、たんたんと。

オンも上手になったし、モデルスカウトもやったりした。

さて、じゃあその中で何を書こうか。迷ったあげく、やっぱり、倉庫、もとい事務所での「たんたん」のことを書こう。事務局は、言ってみれば人と人との結び目だ。月並みかもしれないが、今書きたいのはやっぱりここで出会ったたくさんの人たちとの印象的な出来事のことだ。「タンタン」も「ジャーン」も「タタタタ」も、その人たちなしではありえない。

## リュドミラ・ウクラインカのこと

### 憧れの女性として

リュドミラ・ウクラインカとは、いろんな話をできた。あまり日本の友達にもしなかったような個人的な話でも、レストランの隣の席で、雪だるま号の車内で、そしてこの部屋でメールを通じて、不思議と彼女になら話せた。ベラルーシの大地いっぱい咲き誇るひまわりにも似た笑顔と、澄みきった瞳、間違っていることは間違っているとはつきり言える強さ。わたしにとってあこがれの女性の一人でもある。

2001年、アメリカによるアフガニスタン攻撃が始まり、わたしはすっかり落ち込んで、世界が一部の人間に操られているようなもどかしさを、彼女へのメールにぶつけた。彼女はこう返してくれた。「完璧な世界などないし、人間もまた

完璧ではないのよね。わたしたちにできるのは、自分自身が良い、正しい、と思えることをやろうとすることだけ。」とてもシンプルだけど、その言葉はわたしにずっと浸み入った。それは、少女のころに誤って甲状腺を摘出されるという恐ろしい経験をし、その後、心理カウンセラーとして被災地に住む人々の現実と向き合い続けているリュドミラの言葉だったからこそ、重く響いたのかもしれない。それは、重いのと同時に、わたしを楽にさせてくれるものだった。理不尽な出来事に出会うと、つい人や自分を責めたりしてしまう。それはある意味大事なことであるけど、完璧ではない、と認めることから、その閉じこもった空間からの一歩を踏み出せる。完璧じゃない同士なんだからまあぼちぼち助け合ってやっていくしかないじゃない、と思えるのだ。

### ナターシャさん、

#### ステパンさんのこと

そして、今の気持ちとして、のぞみ21のナターシャさん、ステパンさんのことに触れずにはいられない。わたしがチェルノブイリ通信にはじめて記事を寄せたのは、このご夫婦と工房をたずねた時の、イラストによる報告だった（通信51号）。のぞみ21の作品が生まれる、そのあたいたかい空間を、わたしは「家族」という言葉で表現した。この人々、この空間

から生まれるからこそ、作品自体があたたかいのだと実感したのだ。そんな作品を、バザーやいろんなイベントへ持っていつて紹介できることを誇りに思う。ひとつひとつ形も大きさもデザインも違うので、管理する者としては大変なのだ。その「個性ゆえの大変さ」は、何ともうれいものだ。

ふたりの願いをこめて「のぞみ21（ナージェジダ21）」と名付けられた工房で作られた作品に、この部屋で日々触れているうちに、ふたりの「希望」は、いつの間にかわたしの「希望」にもなっていたのだ。そのことに気づいたのは、去年12月にナターシャさんから「SOS」のFAXが届いた時だった。ふたりの娘二人さんは末期のガンであることがわかったという内容。信頼できるお医者さん達も「延命くらいしかできない」と言う。その日一日は、ショックのあまり、冷静に物事を考えることができなかった。「被災地には、今も苦しんでいる人たちがたくさんいます」などと活動の中で簡単に言っている自分が、あまりに偽善的に思えた。「たくさん」どころか、たったひとりこのいのちはこんなにも重いのだから。思い出すのは、ナターシャさんとステパンさんのぬくもりばかり。わたしは支援をしていると言うが、実際のところ、いつも支えてもらっているのはわたしたちのほうだ。ナターシャさんから

届いたFAXに「SOS」よりも大きな文字で書かれていた「ナージェジダ」。それを見て、はっとした。そんな時にまで、希望をもらうのはわたしたちのほうだった。

先日、二人さんの訃報が、再びナターシャさん自筆のFAXによって事務局に伝えられた。二人さんのご冥福を祈るとともに、「希望」を絶やさずにつむぎ続けたい。強く強くそう思う。

### 事務局を通して得た

#### 様々な出会い

日本国内でも、事務局という場所を通じて、たくさんの人たちとつながることができた。支援を現地でかたちにしてくれる医療専門家の方々、いつもわがまを聞いてくれる業者や関係者の方々、父親のように愛情深く、やさしく厳しく支えてくれるロシア語医療通訳の山田さん、ともに動き動かし、つくっている運営委員・事務局・ボランティアの皆様、いつもそばにいてくれる友人・同僚・家族への感謝は言うまでもないが、この通信をお届けしている会員さん・協力者のみなさんに、この場を借りて言葉を贈りたい。

実は、日々届く郵便振替用紙、お手紙、メールの前に、幾度涙ぐんだことか知れない。メッセージや、メッセージはなくても手書きのお名前から、それを送って



くれた方ひとりひとりの姿、想いが伝わってくる。特に、ひとりで事務局を担っていた頃は、まるでひとりぼっちで活動しているかのような孤独感に襲われることがたくさんあった。そんな時に、想いを共有し、ともに行動している仲間がいると知れることは、とてつもなく心強いことだった。人と人との「結び目」である事務局を担ったことで、たくさんの方たちの姿に触れることができたのは、本当に幸運だった。心から感謝している。

それから、改めて、国内外を問わず、設立からこれまでの活動を支えてきたすべての人たちに心からの敬意を伝えたい。わたしが事務局に入った頃は、実は

ちようど組織の状態が不安定になっていた時で、「無理して組織を続けるのなら、解散したほうがいいんじゃないか」と考えたこともあった。しかし、「支援を待っている人たちがいる」ということと、「届きたいと願っている人たちがいる」という事実は、その考えを180度変えるのに充分すぎるくらい充分だった。それは、これまでに関わったすべての人たちの積み重ねでつくられてきた信頼関係によるものだ。わたしのような小娘が事務局を時にはひとりやって来られたのも、その積み重ねがあったからにほかならない。

もちろんこれでよならではないが、区切りとしてのこの機会に伝えたい。ありがとうございます。

### これからのこと

#### 新たな出発に向けて

さて、これからのことだが、しばらくの間、山梨県の清里で暮らすことにした。「キープ自然学校」のスタッフになって、子ども達の自然体験プログラムなどを行う。「子ども」は、わたしの中にひとつの大きな鍵、ヒントとしてずっと存在し続けている。チェルノブイリ支援運動・九州のスタッフになる決め手になったのも、そこに生きる子ども達のことかどうかどうしても気になったからだった。今度は、子どもたちと直接触れあうことに挑

戦してみるのだ。支援運動・九州には運営委員として関わり続ける。場所は離れてしまおうが、今までと違う時間の流れで、違う人たちとの出会いの中で、違う視野で、チェルノブイリのことを見つめていけるのではないかと思っている。

中学生のときから、大切にしてきた言葉がある。世界で一番大好きな本「星の王子さま」の、キツネの言葉だ。

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目には見えないんだよ。」

どれだけ、目に見えないものを見ることができるか。見ようとすることができるか。チェルノブイリと、その現実を取り巻くものたちは、いつもわたしにこの問いを投げかけてくる。目には見えない放射能、それによる原因不明の体調不良、不安と矛盾との共存、それでも生き続けるいのち……。その中でも、わたしがこの4年間で一番手応えをかんじた。「目に見えないものは、『希望』だった。(文字で書くとなんて簡単なんだろうと思うが、)本当に心で見なくちゃ、見えない。でも、はつきりと、あることを知った。目に見えないのだから、これ以上つべこべ言うのはやめておくけれど、これから、遠くの人とも近くの人とも「希望」でつながっていききたい。そして、これから子どもたちと一緒に目に見えないものを見つめていきたいと思う。

## 事務局長、谷口恵さんの新たな出発に寄せて

チェルノブイリ支援運動・九州の事務局は、私が勤務する(株)ウインドファームのなかにある。故に、私は事務局長の谷口さんとは毎日顔を合わすことになり、日に日に事務局長として成長していく姿を目の当たりにしていた。その谷口さんの仕事にまつわるエピソードは数多くあるが、谷口さんが事務局を去るに当たって、印象深いエピソードを紹介したい。

ある寒い冬の日。会社のスタッフが、引き取るあてもなく、捨てられた子猫を拾ってきた。猫が嫌いな私は、あまり関わりたくないなと思いつつ、外回りの仕事が入っていたので、これ幸いと、その場から姿を消した。会社に戻る頃には、誰が引き取るか解決してるだろうと思いつつ、しかし、心の片隅では、何となく嫌な予感がしていた。どんな状況にあっても、命を大切に。そして、仕事であれ何であれ、決して投げ出さない。そんな谷口さんの基本姿勢と一緒に活動するなかで見えていたから、猫の引き取り手がいなかった場合、谷口さんは猫を膝の上に抱き、その場に居残ることになるだろう。

夜遅く、私が事務所に戻ると、果たして予想通りの状態になっていた。一瞬、知らないふりして帰ろうと思った(ごめんなさい)が、やはり放置できずに、私の自宅に連れ帰ることにした。だが、私があのまま知らんぷりを決め込んでいたら、あるいは私の連れ合いが大の猫好きでなかったならば、谷口さんはそのまま朝まで家に帰らなかつたのではあるまいか。猫の件に限らず、チェルノブイリをめぐる仕事についても、似たような状況が幾度もあったと思います。そう思うと、反省の念に駆られます。

これからも先も、一つひとつの命を大切に守る仕事を続けていくであろう谷口さんの新たな出発を、感謝の気持ちで祝福したいと思います。谷口さん、本当にありがとうございました。そして、これからは運営委員として、よろしくお願いします。(文: 矢野 宏和)

# なつねの集金

## なつねの集金

(敬称略・順不同)

林田洋子 医療法人産科婦人科シモムラ医院 平島  
 憬子 江口由紀子 桑原千鶴子 福山知恵子 上通  
 リメンタルクリニック 青木万寿美 黒岩浩 宮本  
 カズコ 大谷正穂 須崎里仁 吉森養蜂場 藤里弥  
 寿子 中野美知恵 安溪遊地 池田典子 西原幸子  
 北野溥 志和格子 珍部千鳥 満岡慶子 大木正  
 人 廣底裕子 高山幸子 赤尾恭子 白水明代 大  
 園広子 稲吉清子 和田茉莉恵 木下政彦 仲美和  
 子 山田弘子 天賀京子 石田敦子 鴨山恵子 サ  
 トウ矯正歯科クリニック 覚正寺 堀晶子 小崎た  
 ま 谷村牧子 杉本久三子 松井巳美 宇津木将  
 自治労長崎県本部 深堀ミチ子 岡野祐子 岩口香  
 織 三根麻理子 川崎君子 田中香代子 保坂尚子  
 堤安佐枝 後藤和子 本多直純・いずみ 田口常  
 幸 坂田幸子 増田朋子 大分カルメル修道院 黒  
 岩英子 久田文子 隅田直美 福本智子 高藤富美  
 子 原田和代 森下貴史 岡本三保 柳元秀昭 菅  
 野直美 丸山和成 平山淳子 村上和代 須藤利恵  
 子 山口郁代 山田美佐子 中村照子 豊田直也  
 中村順子 井上礼子 清流裕子 田嶋美奈子 賀来  
 紀子 田中直人 武田祐平・芳子・萌・露 宮田香  
 子 和仁幸子 吉田布美子 長沢美知代 松下裕子  
 岸川美好 坂中浩子 林田英明 庄籠道子 豊増  
 清美 太田深幸・雅己 森永紀代子 葉丸淑子 大  
 場満 伊藤利恵 榎本みつ枝 長崎県職員組合女性  
 部 鈴木弘子 林由実子 岡崎智子 島田まゆみ  
 名子いづみ 佐々木郁江 樋渡初美 藤ノ原良子

溝辺・ひまわり読書会 飯屋園今日花・昇介・楳  
 橋田順子 秋永優子 中村幸枝 野中孝子 桜木  
 秩子 日高礼子 大久保仁 佐藤久美 佐治勝子 宮  
 伊藤和夫 財津悠子 新井不動産販売株式会社 宮  
 西いづみ 筑豊互助会 大庭里美 水車むら農園  
 多田宏美 グリーンコープ生活協同組合おおい  
 吉川貴子 岡田薫 澤田和子 力丸邦子 巽恵 広  
 島市授産振興センター 堀之内真吾 松本弘子 萱  
 嶋教代 グリーンコープ生活協同組合くまもと  
 キー・P自然学校  
 (2004年12月1日より2005年2月15日まで  
 に募金をして下さった方、ならびに、「のぞみ21」民  
 芸品、チエルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を  
 通じて活動を支援して下さいました。通信にお名  
 前を紹介することをご許可いただいた方のみ掲載し  
 ています。)

### 募金内訳

30000円コース 422、500円(139件)  
 50000円コース 264、000円(50件)  
 100000円コース 350、000円(34件)  
 「雪だるま2号」カンパ 166、023円(3件)  
 「のぞみ21」カンパ 5、000円(2件)  
 その他カンパ 406、385円(90件)  
 合計 1、613、908円

(分割払いの方もいるので数字は割り切れません。)

★「プレス」における第4回検診には、財団法人  
 福岡国際交流協会より「福岡国際協力人材育成助成  
 金」として専門派遣渡航費19万円をいただきました。  
 福岡市民の皆様へ、実りある検診を実施するこ  
 とができましたことをご報告するとともにお礼を申  
 上げます。

## 募金者からのメッセージ 一部抜粋

●少しでも暖かく年が過ごせますように。●一日も早く、雪だるま2号が購入でき  
 ますように。被害者の方々に年末年始もないのでね。死ぬことしか痛みから逃れ  
 られないというのは痛まし過ぎます。微力ですが。●尊い活動、長く続けて下さい。  
 ●ぼくもがんばる。●子供達のために祈っています。たつても忘れてはいけない現  
 実ですよ。●貧者の一燈、役に立てば嬉しい。●みんなが止めようとしなけ  
 ればおられない。●雪だるま2号の活動を心待ちにしています！困難乗り越えて。  
 ●ささやかですが、何かにお役立て下さい。あなたの勇気をありがとうございます。●息長い  
 活動、ありがとうございます。わずかですが皆様の笑顔につながりますように。●  
 コーヒー・紅茶とてもおいしいです。ありがとうございます。●困難なことでは  
 が連帯します。●通信ありがとうございます。皆様のお働きに頭が下がります。わ  
 ずかでごめんなさい。●お世話をしていた、だきスタップの方々に感謝！！●御心な  
 ら一度ウクライナへ行きたいです。お祈りください。●ほんの少しですが私の気持  
 ちです。●通信をよませて頂き、また少しでも思いました。●気持ちばかりです  
 が、お役に立てれば幸いです。●少しですがお役に立てて下さい。●中一の息子  
 がお年玉より募金します。●息の長い活動に敬意を表します。暖かい気持ちを皆で  
 つなぎあつていきたいですね。●長女が新成人となりました。世界中の子どもに青  
 い鳥が訪れますように。●教師です。平和は子供が作るもの。●伝えます。●地道  
 な活動に頭が下がります。わずかですが。●雪だるま2号が早く活動できます様に。  
 ●脱原発への想いを込めて皆様の活動が実るように祈っています。マトリョーシカ  
 かわいい！●支援の輪が世界中に広がりますように。●少しですがお役立て下さい。  
 ●チエルノブイリの現状のように、私達、多くの人々が知っていなければならぬ  
 ことが世の中にはたくさんありますね。●人事ではない気持ちがほしいです。●  
 小山浩一先生、頑張ってください。●「インタグ」の香に寒さの中、元気がでます。  
 ありがとうございます。●チエルノブイリを忘れず、見守っていただくために。●昨年  
 の大きな災害に忘れ去られることのないようにと心配しています。●とても嬉しい  
 紅茶とコーヒーありがとうございます。少しでもお役に立てばうれしいです。  
 ●子供が産まれて改めて命について考えます。●2005年が少しでも平穏な年と  
 なりますように。チエルノブイリの皆さんにも、世界にも。●本日朝放送された「記  
 憶、チエルノブイリ」をみて今もなお放射能で汚染され、そこに住む人がいるとい  
 うことに、深く考えさせられました。●出産祝いに友人からのぞみ21のマトリョー  
 シカを頂きました。とても可愛く、精巧で暖かい気持ちになります。矢野さんのお  
 手紙を読んで、ニーナさんの命が生まれた娘の命と重なって、胸がつまりました。  
 微力ながらこれからの娘の成長と共に、ナターシャさん、ニーナさん 생각합니다。  
 そしていつか娘にもこのことを話したいと思えます。●年数を経ても風化されるこ  
 となく、しっかりと伝え続けていきたいと思えます。●神のいやしがありますように。  
 ●チエルノブイリ通信62号の表紙を飾ったリユドミラ・チユブチクさんの写真。成  
 人となったリユドミラさんの姿に感動しました。いつも支援運動・九州の堅実な働  
 きに、感謝の気持ちでいっぱいです。●コーヒー好きの方ですが「とてもおいしかっ  
 た！」と言って頂きました。